

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別航空郵便特准第一七号
明治二十一年十月十日第三種郵便物認可最月一回一日発行
平成二十一年五月一日発行（第四百一十一巻第六号）

ホトトギス

五月号



俳句随想 〔三百十一〕

汀子

第一回虚子生誕記念俳句祭が芦屋の財団法人虚子記念文学館で開催された。初日の国際俳句シンポジウム、二日目の俳句祭のいずれも地階にある多目的ホールがその会場に当てられた。多目的ホールは百二十名ほどの収容で一杯になる。昨年までは芦屋のルナホールを借りて芦屋市と協賛という形で開催してきたが、今回から独自できるように話が出来て、このせまい会場で如何に多くの方に参加して頂きよりよく運営して行くことが出来るか皆で智恵を出し合った。参加は申込み制にして、先着百二十名ということにした。ところが案内状を見て申込みが始まると、国際俳句シンポジウムは百三十名ほどになり、虚子生誕俳句祭には二百名を突破する申込みがあり、嬉しい悲鳴が上った。この方たちを何とかして受け入れなければならぬ。メイン会場に百二十名。その他の方はモニターテレビを設えた廊下と談話室に入って頂くことにした。椅子もホテルに準備して貰った。中庭にテントを張って貰い、ストーブを置いた。皆さんが口々に演壇と客席の距離が近く、そのために一体感があってシンポジウムも討論会も自分が参加している実感が持ててよかったと喜んで下さった。

句日記 汀子

平成十九年五月一日 野分会

書き残す花の旅路をふり返る
朝より乾く間もなき甘茶仏
予報より早く降る晩春の雨
五月五日 俳句王国投句
葉採る吉野に 戻り来し静寂
風五月身軽になりし旅靴
五月五日 芦屋ホトトギス会
根切虫あとのまづ薄暑の消えてゐし
じつとしてゐれば薄暑の消えてゐし
五月六日 関西野分会
明易し早起は苦にならねども
夏に入る雨の朝となりけり
甘いものそへて新茶を入れなほす
仕事の手とめてばかりや新茶入れ
今日よりは書類の整理明易し
五月六日 下朝句会
牡丹の花弁落して雨上る
牡丹の花の命を消して雨靴
祭笛聞いた用意の旅
夏霞富士の稜線あるとこ
雨も又家居着く立夏かな
五月七日 ロイヤル俳壇
小倉山見えて遊船帰路となる
夏霞消え全風景嵐山
日の透けてより若楓なりしかな
風見えて風をいなし若楓
又一人若葉に吸はれゆきし庭
五月八日 大阪俱樂部
探しもの辿りつきたる薄暑かな
雨一日快晴一日庭若葉

朝の風心地よかりし薄暑かな
太陽を零してをりぬ若葉かな
お隣の幟来てゐる風の向き
卯浪越えゆかねばならぬ旅路かな
五月八日 綿葉俱樂部
嵐山の若葉に触れて来し一日
芥子咲いて家居楽しむ日曜日
み古野を鎮め卯の花腐しかな
五月十日 清交社
風強き朝の若葉の触る音
雨止みしばかり若葉の光かな
豆飯や一人の生活楽しみて
松風が松蟬の声運びくる
山風が松蟬の声運びくる
森抜けてゆく松蟬の遠ざかる
五月十一日 工業俱樂部
咲きそめてマーガレットの庭となる
袋角少し威敵を取り戻す
これ以て常磐木落葉せぬと見し
掃かず待つ常磐木落葉尽くすまで
気にかゝりぬし消息も夏に入る
五月十二日 四国ホトトギス同人会
アカシヤの花のなだるる高速路
三時間半のドライブ夏めきぬ
をがたまの大樹の風の薫りけり
又蛇を見に帰り来し女かな
筋の花咲けば記憶の中の道
汗かかぬほどに歩きぬ旅心
五月十三日 四国ホトトギス俳句大会
どこまでも涼し曾遊の地の旅路
五月十五日 祝「天為三百号」
新樹晴天に心のあることを
万緑の一樹一樹にある主張
五月十五日 有恒俱樂部
樟若葉より現れて来し一人
アカシヤの花の旅路といへるほど
五月十五日 無名会

更衣してボケットの減つてをり
薔薇園の順路はあつてなき如く
更衣して旅心改め
一と抱へ三十本の薔薇の香よ
朝の間の腕たよりなき更衣
午後からは更衣して現はる衣
好みとは変らぬものよ更衣
五月十六日 夏朝句会
新緑の庭に水音加はりぬ
水と石もて涼しさを演出す
冷房を少し入れたき人数に
芝を刈り水を落して出来けり
新緑の狭庭奥行生れけり
五月十七日 合俳句会
わが旅路土佐は素通り初
降りつもの新樹渡りて来たる風
吹きつもの新樹渡りて来たる風
朝の間の仕事はかどる新樹晴
五月二十三日 祝今橋買理子様御長女東大入学
ぬきん出しよりしなやかに今年
志貫く若さ風光
五月二十四日 きんぎょ会
植糸かへし木々渡る風夏めける
富士見えて来し空の旅夏めきぬ
計画の動き出すとき夏めきぬ
太白の西に傾き夏めきぬ
雨予報さへ夏めいて来たりけり
五月二十五日 時雨句会
余花あると聞けば尾根越え行くことも
そのしらべ親しむ一首蟬丸忌
北国の余花の便りを携へて
雨霰緑に染まりゆきにけり
雨止まぬまま短夜でありゆにけり
蟬丸忌逢坂山を越えゆにけり
五月二十六日 句会と講演の会
釣堀に考へて来し日々業平忌
人生の生きて来し日々業平忌
まだよべの木々の緑の雨霰

廣太郎句帳

廣太郎

平成十九年五月二日 一水会

大朝寝して太陽は僕のもの
石南花を咲かせて二十番札所
連休はちやんと休んで夏近し

五月十日 土筆会

麦秋を指呼に里山輝けり
薪能大倉流のチタブポツ
麦秋や改札口を出でしより
麦秋に太陽を明け渡したる
穀象や築百年といふ厨
闇といふ無限の舞台薪能

五月十三日 四国ホトトギス同人会、大会

降り立ちて虚子の故郷夏めきぬ
ようおいでたなもしといふ涼しさに
バス右折する麦秋の交差点
眼下皆虚子の佛城薄暑
草引いて愚陀仏庵に客待てり
日表といふ睡蓮の目覚かな

五月十四日 朝日カルチャー若草句会

若葉風子規虚子の町見下して
祭笛遠くに聞きて道迷ふ
丸ビルの外壁伝ふ若葉風
ビル淡く若葉濃く副都心かな

五月十五日 草木瓜会

薔薇の香に包まれて弾くシヨパンかな
母の日や父恋ふ虚子の里に居て
日本の薔薇一塊の香を放つ
母の日のママはお出かけパパは家事
夜の薔薇妖しく香る君の部屋
母の母の母の母みて母の日を

五月十六日 登高会

更衣人生五十年は過去
金雀枝の羽音今にも聞えさう
草笛や軍歌演歌にカンツォーネ
黒革の手帳入れ替へ更衣
忌心といふ更衣ありにけり

五月十七日 蕉心会

高橋の雨の葉桜通りかな
夏めきて深川いよよ水の街
新緑を育てる雨として清し
葉桜の道には君と同じ傘
入梅のやうな空あり風のあり
びしよ濡れの蕉像なほも涼しき目

三角池水裏返す水雨かな

雹降つて猫そそくさと軒下に
夏めくや骨皮筋右衛門談義

五月二十日 若水句会

筈は京都醬油は龍野かな
戦没者悼む若葉の濃かりけり

五月二十三日 目黒学園句会

夏霞湖模糊と暮れ残る
若葉風新婦のべールめぐりゆく
芥子の花淋しき時は別にあり
にはか雨若葉雨へと粧へり
罌粟の花咲いて天領明かし初む
夏霞より五万トン空母出づ

五月二十四日 写真俳句投句

ビルの先より薫風の降りて来し

五月二十六日 ホトトギス社句会

浮子動くより釣堀の騒きかな
釣堀といふ緩やかな都心かな

五月二十七日 虚子記念文学館投句

満々と水を湛へて川薄暑
業平忌をみなに恋の多かりき
薔薇の香に酔ひ告白の出来ぬ君
午前二時短夜の恋動き出す
草笛や君との過去は美しく

五月三十日 百夜句会

雑詠

廣太郎 選

千両の揺るる高さの生れけり 徳島 上崎暮潮
 じつと句を作る生甲斐石露の花 同
 大綿の飛ぶ三次元生れけり 同
 里神楽太古の闇となつてをり 龍ヶ崎 今橋眞理子
 饒舌の後の沈黙楯燃ゆる 同
 初旅を終へ日常に着陸す 同
 ふり向けば雲のくらすへ時雨虹 長岡 安原 葉
 寒肥や木々の未来に会へずとも 同
 あきらかに寒肥を待つ一樹あり 同
 風音を風が干切つてゆく冬野 香川 湯川 雅
 雑踏を別の雑踏へと師走 同
 薄氷の解けゆくやうな別れかな 同
 雪女待つかも知れぬ国へ発つ 榎原 稲岡 長
 新年の歌会始ゆるやかに 同
 ざぶと身を沈め初湯を溢れしむ 同
 姫神山 容姿端麗 神迎 仙台 小島左京
 啄木のいのちの森も神迎 同
 菊日和白石和紙にあるぬくみ 同

まづ片目より鼻の眠くなる 神戸 山田弘子
 星生る凧の空青きまま 同
 セーターの恋の背中の凭れ合ひ 同
 初夢の続きも少し見たかつた 東京 橋本くに彦
 東京の色 of 足りなき寒の月 同
 指で拭く小窓の結露寒の月 同
 美穂女在さず三越も消え神農祭 神戸 長山あや
 マロニエの落葉にパリの風を聴く 同
 日めくりの日々を捨て来し古暦 同
 終の咲きたまさかに人通る 八尾 岩垣子鹿
 押し出して冬日向へと鳩の胸 同
 ちやんちやんこ矢張りたこ焼屋に入る 同
 齡忘れあれこれ忘れ年の暮 たつの 浅井青陽子
 冬紅葉書写旧道の登り坂 同
 一人増えけふの山居の松手入 同
 猫が出て子が出て来たる掘炬燵 神戸 千原叡子
 暗算が下手で御破算日短 同
 右折禁止右折又駄目日短 同
 著ぶくれて一番乗りでありにけり 高松 白根純子
 祝ぎ心師走心に優りをり 同
 冬の雨貼りつく句碑の幕を引く 同
 紅葉見て来る火照りのやうなもの 熊本 岩岡中正
 太陽が重し重しと黄落す 同
 うくわつにも眠りし山もあるならん 同

雑詠句評（四月号より）

又もつと拡大解釈をして大地ごと剥れてしまうのか、地球が小さく見えてくるような句である。（廣太郎）

一山の露ことごとく星宿す 神戸 山田弘子

純也・暮潮・弘子
くに彦・雅　・仁義
比奈夫・一步・しげ人
昭代・廣太郎

大地より剥れさうにも冬の晴 香川 湯川 雅

大地の上にとどこまでも冬晴が広がっているのであろう。その青さは、大地をはがれてゆきそうな感じがするというのである。青空全体がどこかへ飛んで行ってしまいたいというのだろうか。全くこの感じが分らないわけではないが、しかし、どこか私にはついてゆけないところが残る。（純也）

季節的には、空が澄んで一層高く感じるのは秋の空であるが、冬も、凍てつくような凜とした空が寒々しく拡がっている感じがするだろう。自身がそんな空に向かって「剥れさう」になるのか、

広辞苑によれば、「一山」とは「二つの山。一つの大寺。云云」とある。「一山」といえば、何でも無い普通の山に違いないが、どことなしに大寺のある法の山を想像する。この句もそういった趣の山の、人気のないはずまりかえった夜のように思われる。山も深く、したがって露も滋く、さらに満天の星の景だが、「露ことごとく星宿す」と述べたところに、飛躍があり、詩があり、この作者の真骨頂がある。大景を自家薬籠中の句に仕立てた見事な力量を感じさせる。（暮潮）

どこか大きな本山の寺ではないだろうか。比叡山のようなイメージも出来る。そこで一夜を過ごしたようにも見えて取れる。この時期、澄んだ夜空には満天の星が見え、地上には無数の露が宿っていた。まるでその星のひとつひとつが魂のきらめきのように清々しく目の前に迫ってくる。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

曆売星占ひの本も積み
寒肥を撒きしと分る夜道かな
魯田や日出づる国の掌
三河路の空白々と初時雨
百寿われ紅顔にして明易き
微笑みて徒然草を読む冬夜
もう鴨の来てもよき頃橋下に
磧野に日差をひろげ枯芒
初富士の全容迫り来る日和
うつくしく舞ひ納めたる金屏風
年玉の袋が少し大きすぎ
焚火跡暖かさうに寒さうに
志ありて怠惰の三ヶ日
初明り俳句の夜明構想す
オゾン座仰ぎて年の夜を眠る
ひそやかに月残りをり初日影
言葉など尽さずもこの冬紅葉
鴨の陣どこかが動きぬる月下

神戸 三村純也
同 東京 稲畑廣太郎
同 豊中 瀧 青佳
同 たつの 浅井青陽子
同 長岡 安原 葉
同 神戸 後藤比奈夫
同 榎原 稲岡 長
同 東京 今井千鶴子
同 神戸 山田弘子
同

鴨のしづこころを眺むしづこころ
つくづくくと日本にあり花芒
いま一度起点に立たん老の春
餓鬼大将老いて忘れぬ独楽の技
人声に遅れ柀花こぼす
迂闊また錯覚となり冬ぬくし
さみどりは大地の祝意齋粥
にほやかに喜寿を言祝ぎ初句会
子ら去んで書初の嵩残りけり
雨しづか山の眠りを深めつつ
月冴えて羽子板市の活気かな
山門をくぐりて一人梅探る
心して刈られし萩の跡と見ゆ
短日の一草に目を凝らしたる
小正月目処に退院期待して
病み抜きし家族の揃ふ小正月
百を生き菊の忌日でありにけり
百歳の墨跡にまた偲ぶ秋

徳島 上崎暮潮
同 吹田 宮崎 正
同 八尾 岩垣子鹿
同 神戸 長山あや
同 箕面 井上浩一郎
同 東京 山田閏子
同 明石 中杉隆世
同 福岡 松尾緑富
同 金沢 藤浦昭代
同

江戸選

天地有情句評

汀子

季節を先取りして鴨の渡つて来るのを待つ作者の句心。

初富士の全容迫り来る日和 長岡 安原 葉

全き富士山を受け止める見事な日和を得た感動。

焚火跡暖かさうに寒さうに 神戸 後藤比奈夫

火を燃した跡が語るもの。

志ありて怠惰の三ケ日 榎原 稲岡 長

志を持つてはいるがせて三ケ日は怠惰で居たい作者の新年。

オリオン座仰ぎて年の夜を眠る 東京 今井千鶴子

よく晴れている夜空にオリオン座を仰いで感慨。

新しい年を迎えるための暦を買いに行つた作者の興味。

魯田や日出づる国の掌 東京 稲畑廣太郎

農耕民族である日本人の住む大地。

百寿われ紅顔にして明易き 豊中 瀧 青佳

百寿になつても生き生きと若々しく夏の朝を迎える思い。

もう鴨の来てもよき頃橋下に たつの 浅井青陽子

(以下略)